

労働組合による国際貢献の今日的意義

やぎさわ かつまさ
八木沢 克昌

●公益社団法人シャンティ国際ボランティア会・アジア地域ディレクター

1. (公社)シャンティ国際 ボランティア会(SVA)とは

SVAは1981年、国際協力NGOとしてカンボジア難民問題を契機にタイ・カンボジア国境の難民キャンプでの教育・文化支援をきっかけに海外での活動を開始した。以来、日本人スタッフを派遣し、タイ、カンボジア、ラオス、タイ・ミャンマー国境の難民キャンプ、ミャンマー、ネパール、アフガニスタンに事務所を開設して教育を中心とした国際協力活動を継続している。SVAの特徴は、難民キャンプや都市スラム、少数民族、移民労働者、辺境の農村等を対象として、その地域や社会の中で最底辺の困難な人々を対象としていることである。アフガニスタンを除き日本人スタッフも常駐している。また、近年、国内だけでなく海外でも頻発する津波、地震、洪水等の自然災害に対しても日本人スタッフを派遣して緊急援助活動を行っている。

SVAは、国内外での国際貢献の分野で労働組合との協働関係を築いてきた。現在でも「連合・愛のキャンパ」や「NTT労組」等のミャンマー難民支援、「セイコー・エプソン労働組合」のカン

ボジア幼児教育支援、「基幹労連」のタイ、ラオス、カンボジアの移動図書館支援及びタイの奨学金支援、「日本教職員組合」のアフガニスタンの学校建設支援、「九州電力労組」のタイの奨学金支援や国際研修等、労働組合から10年、20年、30年単位の継続した支援のパートナーとして関わっている。

2. SDGs 「持続可能な開発目標」とは

地球環境を守り、貧困を克服して全ての人が平和と豊かさを楽しむことを可能とする成果を2030年までに達成を目指すSDGs「持続可能な開発目標」。2015年に国連で採択された。SDGsは、貧困や健康・福祉、教育、気候変動、まちづくりなど17分野の169の目標からなる。「誰一人取り残さない」を基本理念としており、貧困・格差解消が重視されている。

- ① 貧困をなくそう
- ② 飢餓をゼロに
- ③ 全ての人に健康と福祉を
- ④ 質の高い教育をみんなに
- ⑤ ジェンダー平等を実現しよう

- ⑥安全な水とトイレを世界中に
- ⑦エネルギーをみんなに、そしてクリーンに
- ⑧働きがいも経済成長も
- ⑨産業と技術革新の基盤をつくろう
- ⑩人や国の不平等をなくそう
- ⑪住み続けられるまちづくりを
- ⑫つくる責任、つかう責任
- ⑬気候変動に具体的な対策を
- ⑭海の豊かさを守ろう
- ⑮陸の豊かさを守ろう
- ⑯平和と公正をすべての人に
- ⑰パートナーシップで目標を達成しよう

こうした目標の多くが、私たちの生活と企業や労働組合の取り組みと大きく関連している。「誰一人取り残さない」というSDGsの目標達成のためには、政府、民間企業をはじめとして労働組合、NGO/NPO、メディア等多様なセクターを超えた協力、パートナーシップが不可欠である。特に重要なのは、SDGsの取組は、労働組合の大切な果たすべき使命と役割の一つである地球規模での持続可能な開発と社会の構築と合致することだ。

3. 変わる被支援国の現状

1) 経済成長の一方で格差は広がり固定化

私たちがタイを拠点にカンボジア難民やタイのスラム等の教育支援を開始したのは1981年。タイでは小学校を4年で卒業してガソリンスタンドや食堂等で働く姿が街の中で目についた時代。中学校に進学できたのはタイ全体で半分に満たなかった。児童労働や人身売買も深刻な時代だった。当時、バンコク市内にはスラムが約1,000ヶ所、約120万人。バンコクの人口の約25パーセントを占めていた。

タイでは経済成長とともに現在はほとんどが中学校を卒業している。児童労働や人身売買も表面的には見えない。タイは発展途上国から中進国へと大きく変貌を遂げた。高校への進学率は80パーセント、大学への進学率も45パーセントを超えている。しかし、タイでは貧富の格差は拡大している。現在、バンコクにスラムが約2,000ヶ所あり、人口にして約200万人が暮らす。30年前と比較してスラムの数と人口は2倍に増加している。立退き問題も深刻だ。また、都市と農村の格差も固定されたままだ。富裕層は、幼児期から家庭教師をつけて塾に通い、教育の質の高い名門校に行き、教育の格差は固定されている。バンコクのような首都の高層ビルの立ち並ぶ一面だけを見てその国を判断すると、国の全体を見誤ることにつながる。目線をどこに置いてみるかによって国や社会の姿が変わって来る。

格差は国内だけでなく隣国や地域間においても深刻だ。一例として、タイの隣国のミャンマーは、2011年の民政移管後に東南アジアの最後のフロンティアとして注目をあびている。しかし、3割の子どもは小学校を卒業できず、中学校には半分しか通えていない。児童労働があちこちで目につく。

カンボジアも小学校などの校舎は整備されて進学率は上がった。首都プノンペンだけを見ると高層ビルが立ち並び経済発展が進むように見える。



バンコク最大のクロントイ・スラムと高層ビル

しかし、今でも農村の小学校の大半が教室と教師不足から午前と午後の2部制になっている。国連開発計画(UNDP)の最新の発表では、カンボジアの人口の35パーセントが貧困層だ。

2) 国境を超える労働者と国の地域間の格差

タイ在住の日本人は登録している数だけでも7万人を超えている。国連の統計・推計によればタイの2015年時点の平均年齢は37~38歳だが、2020年での予想は40~41歳となっている。タイ国内でも少子高齢化が深刻化している。タイでは常に30万人から50万人程度の労働力が不足している。

建設現場や水産加工工場などタイ人が敬遠するいわゆる3K職場はミャンマー人やカンボジア人等の出稼ぎ労働者なくしては成り立たない。隣国ミャンマーからの出稼ぎ労働者だけでも少なくとも300万人。カンボジアから100万人、ラオスから60万人と推計されている。カンボジアやミャンマーの農村では仕事がないために、自国より賃金が2倍以上高いタイへと流入している。特にカンボジアの中でタイ国境に近い県では、首都プノンペンに行くよりもタイの首都バンコクに出る方が近いという事情もある。ミャンマーも同様の事情を抱えている。バンコクのスラムもカンボジア人やミャンマー人が増加して、スラムも国境を超えて



バンコク最大のクロントイ・スラムに住むカンボジア人の住居(7家族30人が暮らす家)

形成される時代となっている。タイ国内の労働力の不足と隣国の貧困、そして、国境を超えた格差が現在の東南アジアの新しい象徴的な問題だ。

こうした中での出稼ぎ労働者の過酷な労働環境や、登録、労働許可から人権問題と様々な課題を抱えている。

今年のタイでのサッカー少年たちの洞窟からの救出劇でも子どもたちの無国籍問題が大きな関心を集めた。タイではミャンマー国境やラオス国境を中心に50万人の国籍を持たない人々がいると推計されている。タイでは隣国のカンボジアやミャンマーからの出稼ぎ労働者たちの子どもたちの国籍や登録に加えて教育の機会の問題も深刻だ。こうした問題の解決のためには、一国だけでなく国境を超えた出稼ぎ労働者を出す側の問題と、受け入れる側の問題の国境を超えた二つの国からの「クロスボーダー」の関わりが必要となっている。



タイ・ミャンマー国境(狭い川を渡ってタイへ)

4. 格差・貧困先進国のアジアに学ぶ

日本でも格差が深刻化し子どもの6人に1人が貧困に直面している。格差も固定化しつつある。別の視点から見るとタイは貧困先進国となっている。さらに数百万単位で外国から国境を超えて移

民労働者、外国人出稼ぎ労働者を受け入れている先進国でもある。約10万人におよぶミャンマー難民の受入れも30年以上継続している。

私たちが関わるタイのスラムやミャンマー難民キャンプ、カンボジア、ラオス、ミャンマー、ネパール等では、貧困の中でも「絶対的な貧困」が存在している。日本のような「相対的な貧困」ではない。地域社会に根差したNGO等は、貧困や格差を解消するための30年、40年という長年の取り組みの歴史と経験、知見を持っている。劣悪な居住環境や麻薬、犯罪等想像を絶する厳しい貧困の現実もある。そんな厳しい環境の中でも奨学金や一冊の絵本や図書館との出会い、教育の機会によって貧困を克服した子どもたちの成功例もある。教育の機会の平等性や社会の公正がいかに大切かを再確認させられて学ぶことが多い。また、貧しい地域の本来のコミュニティが機能し、相互扶助や社会のセーフティーネットも存在している地域もある。

アジアの多くの国には貧困と格差の中に絶望と希望が混在している。街には熱気があり不思議なエネルギーがある。多様な宗教と民族が暮らし、多様な価値観がある。国民の平均年齢が若いこともあるが閉塞感が少ない。一方で日本は社会に閉塞感が漂い始めているようにみえる。国際貢献の現場への関わりからは、一方的に支援するというだけでなく、アジアから様々な視点の中で学

ぶことも多い。

5. 労働組合の国際貢献の今日的意義

NGOの強みは特定の国や地域で政府が入れない貧困問題を抱える地域に入りこみ、草の根のネットワークを持つことである。現地のニーズを知り尽くし、言語や文化や価値観等にも通じて地域住民だけでなく行政や政府との顔の見える信頼関係を築いている場合が多い。しかし、日本のNGOの多くは、欧米の歴史の長い国際NGOと比較して資金と組織力は脆弱だ。

NGOから見た労働組合の強みは組織力を生かした資金力と国内のネットワークである。労働組合は分野別の専門の人材を抱えている。労働組合の強みとNGOの強みを生かせば、SDGs「持続可能な開発目標」の達成への大きな力となり得る。

私たちが事務所を持つタイのバンコクのスラムには、高校生から大学生がスタディーツアーや研修視察、ボランティアとして年間に数百名が訪れている。特にスーパーグローバル大学等の制度により近年関心が高まっている。こうした時代の流れの中で、労働組合の国際貢献活動を通して海外の現場を訪問して若い組合員が研修やボランティアを行うことは、世界観や価値観等の視野を多様化し広げることにつながる。



日本の大学生と北タイの少数民族の中高生 学生寮でのスタディーツアー

国際貢献の中での現場への視察や研修、セミナーを通して異なる民族、宗教、言語や文化を持つ多様な国や社会の人々と関わることによって「多様性」を実感できる。何よりも国際貢献活動や交流・研修を通して、グローバルな視点と多様性の視点を兼ね合わせた労働組合の将来を担う人材の育成につながる。

6. これからの国際貢献に必要なこと

私たちNGOと協働する労働組合をみると、継続して活力のある組織と活動にはいくつかの共通点がある。国際貢献の哲学が明確であること。先駆的な卓越したリーダーが存在すること。対象となる国や地域のニーズを的確に把握していること。信頼できる国内外のNGO、現地の住民組織との信頼関係とパートナーシップを築いていること。国際貢献の成果を明確に伝えていること。国際貢献の現場への視察やモニタリングを定期的に行っていることなどあげられるが、特に、労働組合の国際貢献の担当者や役職者だけでなく、研修ツアー等で若い組合員が現場を訪問する機会があることは大切な点だと思われる。

タイやカンボジアへのユースセミナーや現場研修に参加した組合員から「今まで何故、国際貢献のためのカンパをするのかわからなかったが、現場で役に立っていることが確認できて嬉しい。感動した」、「自分の組合に対して誇りが持てた」、「生き甲斐、働き甲斐を見つけた」という多くの

声を聴いた。

NGOの活動は、自発的な意思によって活動が支えられている。組織として動員するということはない。ボランティアの語源として知られる、ラテン語の「ボランタス」(自由意志)、フランス語の「ボランテ」(喜びの精神)、英語のボランティア(志願兵)、ラテン語の「ボルカーノ」(火山)との説もある。熱き情熱に置き換えることもできる。

最近のNGOに参加や支援する若い世代は、本来のボランティア精神に加えて、活動に参加する中で1)自分自身の学びと世界を広げること、2)国境を超えて誰かに貢献できる喜び、3)自己実現と満足感、4)多様な出会いと楽しさ等を大切にしている。こうした視点は、労働組合の今後の活力ある国際貢献活動においても重要になるとと思われる。

労働組合の運動の中でも国際貢献活動は、組合運動の垣根を超えてより活性化し、組合員の「働き甲斐」や誇りにつながる可能性を秘めている。「組織は人」。世代交代の真ただ中にある労働組合においても、国際貢献活動は新しいリーダーや人材の育成にとっても大きな役割を果たすのではないかと。支援される側よりも支援する側が得るもの、学ぶものが多いのが常だ。支援は有形無形を問わず必ず組織や人に返ってくる。労働組合の国際貢献活動も個人のボランティア活動も義務ではない。むしろ、人間として世界を広げて豊かに生きる権利である。何よりも具体的な行動を通して「誰一人取り残さない」というSDGs(持続可能な開発目標)の実現に大きく貢献できることにつながる。